

令和2年5月11日

令和元年度研究ブランディング事業 外部評価結果

関西医科大学学長 友田 幸一

令和元年度の研究ブランディング活動について、本事業の計画及び進捗報告について外部評価を受けましたので公表いたします。

外部評価者3名及び外部研究アドバイザー1名による評価の結果、令和元年度の事業成果として、研究面では領域横断的プラットフォームの構築による研究が順調に進んだことにより、確実に難治性免疫・アレルギー疾患の最先端研究拠点大学としての地位の確立に繋がっていると考えられること、また、全学的なブランディング活動の取り組みとして、多職種が連携し横断的な診療体制の構築、啓発活動、人材育成に大きな成果を挙げたことなどが評価されました。

一方、研究をより絞り込み、治療法や創薬に繋げるなどの具体的成果に至る計画を充実させることや、PR活動をより若年層まで広げる必要があることなどのご助言をいただいたことから、今後、コメントに示された改善点や期待に応えるべく、大学全体としてさらに充実させていくことを検討いたします。

## 令和元年度外部評価

外部評価者

所属 大阪大学大学院医学系研究科・呼吸器免疫内科学講座

氏名 熊ノ郷淳

記入日(令和2年4月1日)

評価コメント

「難治性免疫・アレルギー疾患の最先端研究拠点大学としてのブランド形成」をテーマに平成30年度より事業をスタートさせている。

令和元年度は

- 1) 領域横断的研究連携プラットフォームの構築を強化、
- 2) IgG4 関連疾患の診断基準・重症度分類・診療方針の検証と病態解析、
- 3) アレルギー・慢性炎症、感染症に対する治療法開発に向けて基礎-臨床研究ネットワークおよび領域横断的支援体制の構築

の3本の柱の下、事業を展開し、1)3)については、領域横断的研究体制を強化するために、難病センターを附属病院に設置し、講座・領域を超えた難病疾患を対象に研究組織と学外の難病連携先との広域連携組織を構築している。2)については、IgG4 関連疾患のゲノムワイド関連解析では疾患との関連が強く示唆される変異を発見し *Lancet Rheumatology* に報告、表紙に採用されるなどのブランド形成に繋がる大きな成果を上げている。またこのような活動の中で、AMED-CRET 研究の成果につながるような多くの業績をあげており、ブランディング活動のための広報戦略も有効に機能している。本年度の成果は、確実に難治性免疫・アレルギー疾患の最先端研究拠点大学としての地位の確立に繋がっていると考えられる。

## 令和元年度外部評価

外部評価者

所属 近畿大学医学部アレルギー内科/呼吸器内科

氏名 東田有智

記入日(令和2年4月10日)

### 評価コメント

貴学では、学長の強力なリーダーシップのもと、14講座・部門、アレルギーセンターが参画し、研究成果や先進医療・センターの実績を集約することで、難治性免疫・アレルギー疾患の克服に取り組まれ、その成果を世界に発信し同時に地域医療に貢献するという「研究ブランディング事業」を推し進められております。

全学的な取り組みは、多職種が連携し横断的な診療体制の構築を可能とし、啓発活動、人材育成にも大きな成果を上げられていると思いますし、また、アレルギーという多くの国民が症状を抱える国民病とも言うべき疾患に対する研究は、幅広いニーズに対応しており、社会的貢献度の高き等、大学病院としての診療、教育、研究の使命感を具現化されており、近大医学部・病院も見習うべきことが多々あると感じております。

その様な取り組みをされている貴学に対し、事業内容について意見することはできませんが、ブランディング活動の一環である「広報戦略等」について、貴学で予定されている広報内容で問題ないかと思いますが、ご意見(事例紹介)させていただきます。

#### ・クラウドファンディングの活用(資金調達)

近畿大学では、「実学教育」を理念に掲げ、近大マグロのように研究成果によって社会に貢献するための教育・研究を行っており、その資金調達的手段としてクラウドファンディングを活用しています。(医学部も事例あり)

PRの観点でもクラウドファンディングの活用はやり方次第では効果があると思います。

#### ・ノベルティについて

貴学のノベルティにクリアファイルとありますが、対象の研究者・医者の方に使ってもらえて、かつアレルギーに関連のあるものとして、マスクにも活用できる「手ぬぐい」等いかがでしょうか。

#### ・公開講座について

呼吸器アレルギー内科にて行った公開講座では、東尾理子さんをゲストスピーカーで呼んで、実際にアレルギーで苦しむ人の話を聞いて共有する等の取り組みも行いました。

#### ・その他

当院も課題ですが、充実した SNS やスポークスパーソンの活用が行われれば、より効果的な広報活動が望めると思います。

以上

## 令和元年度外部評価

外部評価者

所属 関西電力病院

氏名 千葉 勉

記入日(令和2年4月13日)

評価コメント

令和元年度の活動目標として、領域横断的研究の支援体制の構築・強化が示され、その中でも IgG4 関連疾患の診断基準・重症度分類、診療方針の検証、アレルギー・慢性炎症、感染症に対する治療法開発が具体的な目標として掲げられた。そうした支援体制を構築する中で、IgG4 関連疾患については、ゲノムワイド関連遺伝子解析がなされ、特定の関連遺伝子が同定されたことは、今後の診断、治療法の開発につながるものとして評価される。またプロスタグランジンE受容体(EP3, PE4)のアゴニスト、アンタゴニストとの結合の結晶構造の解明や、GPCR の高発現株や安定化変異体のハイスループットスクリーニングシステムを立ち上げて、PGD2 受容体 DP2・アンタゴニストの結晶化に成功したことは、今後アレルギー疾患や炎症性疾患の治療薬の開発につながるものである。さらに、そのために、難病センターを設立して、学外との連携を強固にし、難病患者を集積し、患者の検体資料の集積・登録をおこない、その活用を促進したことも評価できる。また実際に IgG4 関連疾患の診断基準、重症度分類の策定・見直しには大きな役割を果たした。さらに SLE のバイオマーカーとして血清 IFN $\alpha$ 、HMGB1 の重要性を示した。また Brau 症候群患者から iPS 細胞を樹立して、その病態解析をおこなったことも評価できる。一方、病態モデル動物解析においては、ヒト化マウスにおいて、胸腺細胞の分化・増殖、リンパ球選択の組織イメージングによる解析法を樹立したことは、胸腺における免疫能獲得の機序解明に大きく貢献できると期待される。また免疫担当細胞における小分子G蛋白の役割を様々な方法で検討しており、治療法開発につながるものと期待される。

このように、領域横断的プラットフォームの構築による研究は順調に進んでいると考えられる。しかしながら研究は若干総花的であり、的が絞り切れていない印象も受ける。また得られた研究結果をシーズとした、創薬や治療法の開発の計画は必ずしも十分なされておらず、したがって具体的な成果にやや乏しい印象を受ける。今後は、得られた成果(シーズ)をいかに医療の現場に役立てるのか、特に治療法や創薬開発に結び付けるのかについての具体的なロードマップの作成と、その実行が望まれる。

またブランディング活動については、シンポジウムや事業紹介などの努力はなされているが、特に当初計画されていたように、地元の高校生などを対象とした啓蒙、教育活動については、さらにいっそうの努力を期待したい。

## 令和元年度外部評価

外部評価アドバイザー

所属 大阪大学免疫フロンティア研究センター

氏名 黒崎知博

記入日(令和2年4月8日)

評価コメント

例えば免疫領域では、今までのモデル動物マウスを用いた基礎研究から、一歩進めて Human Immunology 研究、更に新規治療法の開発まで、一体化しておこなう研究の重要性が強く言われている。

その context では、1,豊富な臨床例、臨床サンプルを有していること。2,高いレベルでの医学基礎研究を展開していること。3,1と2を埋める研究プログラムの創設、又、臨床例にも深い理解をして、そこから出た疑問を基礎研究で展開できる人材育成。4 新規治療法開発へ向けての(例えば民間会社)連携システムの、4 点がバランスよく進行することが肝になる。

その点においては、関西医科大学は、1,2 に関しては非常に高いポテンシャルを有しており、この事業の研究成果にも、その一端が明確に見受けられ、本事業の成果と言える。一方3に関しては、おそらく事業の資金規模の問題と推察されるが、関西医科大学の特徴を最大限いかして、何とか、基礎・臨床連携プログラムを創設に必要な基盤整備、例えばゲノム解析部門の充実、が必要と考えられるが、十分とは言いつらい状況にあるように見受けられる。

是非とも関西医科大学の臨床・基礎研究の strong point をますます発展さすように(おそらく資金面の限りがあるため、どの領域もすべてというよりは、選択・集中が必須になると考えられる)、臨床・基礎一体化した研究、又それを行えるような基盤整備を行って頂きたい。